

【1 B：体を離して仕切り直す】

レイヴンは一度冷静に身体を引き離して距離を置いた。

「あら、責めてこないんですか……？」

危ない所だった。おそらくこのサキュバスはキスが得意技なのだろう。あのまま唇を重ねていたら、恍惚の中でわけも分からずにイカされていたに違いない。

「ふふっ」

下級の淫魔にも関わらず余裕のある笑み。赤い口紅がヌラリと光っていた。

何も相手の得意分野で勝負する必要はない。先ほどサキュバスのアソコや乳房を愛撫したら、楽勝と感じさせるほどの手ごたえ感じたのだ。だが同じように攻めたら行動を読まれ、反撃を食らってしまうかもしれないから、今度は挿入してやろうと思った。

「このお口が怖くなっちゃったんですか……？」

サキュバスは口を開けてレローツと舌を出し、見せびらかして挑発してきた。舌が唾液で光りヌルヌルと濡れ、ゾクリとした魅力を放っている。それを見たレイヴンはやはりキスは危険だなと確信し、次なる手を出した。

《選択肢》

【1 C：正常位で結合】

【1 D：後背位で結合】